



「初恋」



しまざきとうそん

島崎藤村の詩「初恋」を読んで、自身の初恋経験を振り返る人は多いのではないのでしょうか。

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思ひナリ

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄紅の秋の実に

人恋ひ初めしはじめなり

.....

前髪をまだ上げたばかりのきみが

リンゴの木の下に現れた時

その前髪にさしてある花で飾られた櫛の

その花のようにきみを美しいと思った。

きみは優しくそうな白い手を伸ばして

ぼくにリンゴを手渡してくれた。

薄紅色の秋の実のリンゴを見て

ぼくは生まれて初めて人を好きになったんだ。

初恋を経験した少年の切々とした心情が、リンゴの色やにおいととも、思い出として伝わってくるように思われます。少女の前髪に飾られた花の櫛もまた、初恋の印象にふさわしいのではないのでしょうか。

高校生のみなさんに、初恋について聞いてみたことがあります。時期的には、中学時代という答えが多くみられました。両思いもあれば、片思いもあり、単なる憧れというケースもありました。対象としては、同じ学校のクラスや部の仲間や先輩・後輩、隣り近所の幼な友達、中には先生への憧れと言う人もいました。自分の身の回りや、近くに存在している人が、対象となっているようでした。心理学では、恋愛の近接性と言って、恋愛が成立する条件の一つになっています。

個人的には、初恋には、当人は全く気付かないながらも、あらかじめ設定された条件というものがあるように思います。年齢や気分、本人の好みの季節や環境が見事に一致した時、まるで魔法のように対象が現れるのです。あるいは、ずっと以前から知っていたとしても、その時、まるで全く未知の存在が目の前にいるかのように錯覚し、初恋の感情が芽生えるのではないのでしょうか。

初恋こそが、人が誰でも経験するごく普通の、重要な人間感情の一つではないかと思えます。